

乾燥状態の虫体から日本海裂頭条虫の可能性を報告した1症例

©原木 敬人¹⁾、影山 憲貴¹⁾、門馬 絵里¹⁾、作間 俊介¹⁾、小林 紘士¹⁾、井上 雅則¹⁾、井上 淳¹⁾、遠藤 康実¹⁾
日本医科大学付属病院¹⁾

【はじめに】日本では寄生虫症は稀な疾患と考えられているが、近年、食の多様化や流通機構の発達に伴い、特に裂頭条虫症は増加傾向を認めている。今回我々は、寄生虫検査の過程において稀な症例を経験したので報告する。【症例】38歳男性。主訴：下痢。食歴：スーパーで購入した刺身を食べたほか、2021年5月当院初診の2ヵ月前に白魚の踊り食いをした。海外渡航歴なし。現病歴：当院初診の3週間前から3回ほど排便時に蠕虫の存在を自覚していた。きしめん状の寄生虫様検体を近医に持参したところ、寄生虫症疑いとなり当院紹介となった。【対象】糞便および乾燥した虫体を用いて検査を実施した。【方法】糞便は直接塗抹法と集卵法（ホルマリン・エーテル法）を実施した。また、乾燥状態の虫体では検査不能であったことから生理食塩水に浸した後にエタノール固定をして虫体鑑別を実施した。さらに、観察により虫体の中に虫卵を認めたため、虫体から虫卵を取り出し鏡検した。そして、虫体は国立感染症研究所で遺伝子解析が実施された。【結果】直接塗抹法と集卵法は陰性であった。虫体は白く平たい紐状で多数

の片節が連なっていたことから条虫類と判断した。また、虫卵は裂頭条虫様であり海外渡航歴がなく、国内感染が疑われたために日本海裂頭条虫と推察し臨床に報告した。そして、診断後に駆虫は実施されたが虫体の排出はなく、駆虫後に糞便の直接塗抹法と集卵法が陰性であったことから治療終了となった。その後、遺伝子解析により日本海裂頭条虫と同定された。【考察】本症例は、患者が持参した虫体が乾燥し変色して検査できない状態であった。しかし、生理食塩水を用いて復元したことにより虫体の観察が可能となった。また、糞便中には認められなかった虫卵が虫体から検出できたことで、より寄生虫診断に有益な情報を得ることができた。これらのことから、乾燥状態の虫体が提出された場合でも、生理食塩水を用いれば十分に鑑別・診断が可能であると考えられた。そして、日本海裂頭条虫の可能性を結果報告でき治療に繋がった。このことは、我々が実施した検査の過程は病院の検査室レベルにおいて寄生虫診断の一助となる可能性が示唆された。
連絡先—0338222131